挑戦（上）

清水一行

講談社

でめ金挑戦（上）

1970年２月26日　第１刷発行

著　者　清　水　一　行

発行者　野　間　省　一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽２-12-21
郵便番号112
振替東京３９３０
電話東京（942）1111（大代表）

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

©Ikkō Shimizu 1970 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0093-123772-2253（0）

目

次

号砲一発……7
おんな運……19
なにが得か……36
勇躍上京……52
金髪の客……67
不良外人……84

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

大倒産……99
委任状作戦……117
野心……137
初夜……152
夜のビル……174
新妻出奔……190

装幀　村上豊

でめ金挑戦（上）

号砲一発

柵をくぐって豊太が小屋へ入ると、突然山羊は首を低く、ぴったりと尻を壁にすりつけて身構えた。

明けきらぬ朝は、山裾に薄く棚引く靄もしめっぽく、四月とはいえ衿足を這う肌寒さがまだ残っていた。

山羊はなおも豊太を警戒し、窺う目でじっと見つめている。この頃は特にこういうことが多く、昨日など豊太の姿を見ただけで、この牝山羊は藁の上に坐りこみ、頑強に尻を上げようとしなかった。

そういう時の山羊は、動物ながらも豊太にたいする明らかな敵意をその全身にみなぎらせていた。

「こら、向こうを向け」

豊太は山羊の頭を払うようにして、体の向きを変えさせようとする。しかし今日の山羊は四肢を強くふんばり、どうやら豊太にたいする徹底反抗を固く決意したものとみえ、これでもし牡のように鋭い角を持っていたら、隙を見て豊太に突きかかってくるのではないかと思える気配だった。

「畜生、なにをすねてるんだ」

豊太は拳を握って山羊の固い頭に一発見舞った。しかし山羊はすぐに体勢を立て直し、怯えた瞳で豊太を見上げる。よほど今日は機嫌が悪いらしい。

それとも、連日の、日によっては二度も三度もという豊太のあられもない仕打ちに耐えかね、もうこれまでと覚悟を決めたものとも思われた。

豊太は一度柵から出て、刈り草を一つかみ、山羊の鼻先へ投げ出すと、本能的に山羊は一、二歩前へ出た。

どうも人間という奴は悪賢くできている。山羊の満満たる警戒心を、わずか一つかみの刈り草でごまかしてしまうのだから、その後で災難を被る山羊こそ、いい、面の皮というものだ。

もっとも石川豊太の場合は、ただ単に悪賢いという

よりも、もともと頭脳構造が抜群にできていた。なかでも彼の記憶力は素晴しく、幼時、神童として彼の名は近在近郷に知れ渡っていた。

彼が雄々しい呱々の声と共に、母親の胎内から初めてこの世にその姿を現わしたとき、彼はしっかりと三本の指を取り上げた産婆に突きつけたと言われている。初めはそれがどういう意味か練達した産婆にもわからなかったが、しばらくして彼の誕生日が、出産予定日より三日早かったことに気づき、これはえらい子供が生まれたというので、忽ち大騒ぎになった。

そこで、実際の誕生日は四月二十六日だったが、両親と産婆がいろいろと話し合った末、当人の希望をいれ、三日後の日付で、出産届を村役場へ提出することにした。

ところがその三日後がどういう日なのかは、彼の両親も村役場へ出生届を出すまでは気がつかなかった。

〈四月二十九日、午前零時出生……〉

「ほう、天皇さまと同じ誕生日かいな」

豊太の出生届を見て、役場の吏員が感嘆の声を上げた。言われてみて豊太の両親も、たしかにその日は天長節を祝って日の丸の旗を上げたことを思い出した。その後豊太の神童ぶりを物語る逸話は多い。

三歳で読み書きを知り、五歳のときすでに二桁の掛け算ができたというのだが、五反歩そこそこの知れた小作農の次男坊のことでもあり、豊太に読み書きや掛け算を教えるような人がいたとは思えないので、逸話には多分に伝説めかした粉飾が多かったようである。

が、神童かどうかはともかく、小学校は開校以来の秀才で通し、やがて農業を嫌って、なんと農学校へ進み？　……、卒業後は軍人に憧れて百姓にかえった。

よくある夢と現実の乖離現象だが、この頃になると神童も色気づいたただの若者となり、うろうろと林の中を歩き回った。そんなことから豊太は奇妙な性癖を覚えるキッカケを掴んだ。

村の若者が四、五人集まると、きまって出る話は若い娘や後家の行状である。そのとき、うすのろの文公が「こないだ山羊の話を聞いた」と、突拍子もない声で言った。

「なんでも山羊は人間とよう似てるそうや、牝の方が……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「使いものになるのかな」
「羊飼いはそんなそうしてるって、本に書いてあるそうやで」
「まさか人間の子供が産まれやしまいな」
「わかんねえが、豊太のうちに牝山羊がいるけどどうや」
「知らねえなそんな話」
「みんなで試してみるか」
「駄目だ、親父がうるせえから」
豊太はにべもなく仲間の申し入れを拒んだ。
だが、四年制の農学校を卒業して、いずれは士官学校へと思いながら小作農の手伝いをしていたくらいだったから、村の神童も十七歳でまだ童貞だった。
彼は家へ帰ると早速山羊小屋へ忍びこんだ。
短い尻尾を指先でつまみ上げ、豊太は恐る恐る覗きこんだ。しかしまだ異性の本物を拝んだことのない悲しさで、山羊が本当に人間に似ているのかどうか、豊太には見当がつかない。
——人間もこんななんだろうか。
初め豊太は、どうにも様の悪いものだと思った。

村の娘で一つ年下の愛子を彼はひそかに想っていた。愛子と道で会っただけで、その夜豊太はきまって鼻血を出した。愛子は丸顔で眼が大きく、すべすべな頬が赤かった。しかしその愛子も、山羊に同じ様の悪いものを隠しているのかと思うと、なんとなく不気味である。
しげしげと覗きこんでいるうちに、豊太は自分ではそうしようと思ったわけではなかったが、知らぬまに手がのびていた。
恥かしい桜色のその感触は、柔らかく母親の乳房のように生温かい。
といっても満面のニキビ顔に髭の生えかかった十七歳では、母親の乳房の感触など、とうの昔に忘れてしまっている。ただ豊太は、言いようのない指先の感触の愉しさに引きこまれ、熱中していった。
豊太は体が大きかった。十七歳で一メートル七十センチもあり、骨太で筋肉が固い。文字通り軍人向きの体軀だった。
それだけに山羊を覗きこもうと不自然にこごむ姿勢が次第に窮屈になってきた。止むなく敷き藁の上に膝

を突いたのだが、その瞬間、真直なものが不自然にねじ曲げられた圧迫をズボンの内に感じ、慌てて腰を引いた。

好きな愛子と道で会っただけで鼻血を出す十七歳の豊太である。

見たり聞いたり嗅いだりするだけでも、忽ち不自然な状態に陥ることがしばしばある豊太のことだ。人間に似ていると言われた山羊に触っているのだから、こらえきれる道理がない。

尿の臭気がこもった山羊小屋の空気を思いきり吸いこみ、息を止めたその一瞬、あたりにしぶきが飛び散った。

それからが病みつきになってしまったのである。

一度など、俄かに頭上にふりかかったしぶきに驚いた山羊が、一声いないて飛び上がった瞬間、凛々と恍惚感に打ち震えていた豊太の不自然なものが、山羊の後足で蹴上げられた。

豊太の知っている限りの肉体的な苦痛のなかで、その一撃以上のものはなかった。

「ギャア！」

彼は山羊以上に飛び上がった。

そのときは蹴った山羊も憎かったが、半面天罰だという悔恨もあり、びっこを引きながら山羊小屋を這い出したものである。

とにかく二日間は歩くこともできない。もちろん例の恍惚の作業など思いも寄らず、それ以来、彼は自分の非人格的な部分が、確実に一回り太くなったと感じたくらいだった。

しかしそれが、後年になり、やがて青雲の志を抱いて日本一の金持ちになろうと決意してからの豊太に、思いもしなかった大援軍の役割を果そうなどとは、そのときの落ちぶれた神童の霊感に、露ほども感じなかったのは、なんとも皮肉な話であった。

農業を嫌って農学校へ入り、軍人を志して百姓にかえった豊太にとって、その最も嫌いな百姓仕事から足を洗う人生の転機が、降って涌いたように訪れたのは、翌昭和十二年のことであった。

十八歳で一メートル八十センチの巨漢に成長した豊太に、代用教員の口がかかってきたのである。

彼を代用教員に採用しようというのは、静岡県Y郡

の山名小学校。そこの教頭八重田信造が、豊太の農学校時代の、軍事教練の教官であった。

同じ静岡県のY郡でも、石川豊太の生まれたのは気賀町で、山名小学校からは十八キロも離れていた。

浜名湖にそそぐ都田川の入江に程近い小さな田舎町だが、慶長六年、徳川家康の時代には、東海道本坂越、後の姫街道の中心街の一つとして、厳重な関所まで置かれて栄えた町だった。

しかしその後は、いわゆる東海道、その方に枢要な交通を奪われて、ずっとさびれた街になり、豊太が育った頃は、まだ二俣線も開通していなかった。

この気賀町でも、中心から大分ずれた陣平山の山間の油田部落に豊太の生家があった。

この、陣平山に近い油田部落の周辺一帯は、その昔、平清盛に敗れた源氏の残党が、命からがら逃げのびて、そのまま住みついたという言い伝えがあったが、豊太の家ではかつて源氏のげの字も話題になったことがないところをみると、どうやら土着の水呑み百姓の家系だったものとみえる。

仮に豊太が、名だたる源氏の末裔であったとしても、いまさら死んだ系図に血の密度を頼って、どうなるというものでもなかった。

それはそれとして、折からの教員不足に悩んでいた山名小学校では、師範出の資格者を求めたところで、なかなかみつかるものではないと、代用教員で間にあわせることになり教頭の八重田信造は、はたと石川豊太に思い当たったという訳であった。

かつて自分も教えたことがあり、その上近隣にも伝わるほど神童のほまれ高い豊太が、町の農学校を卒えると村へ帰り、家業の百姓仕事を手伝っていると聞き、白羽の矢を立てて、早速八重田教頭自ら説得に訪ねてきた。

「どうじゃ、先生いうのもええもんじゃぞ」

褐色に土焼けして干からびた八重田は尊大に言った。

「先生ですか……」

豊太はにゅっと突き出た太い鼻柱をなでながら、さした興味も感じない素振りである。

「嫌いな百姓仕事よりよかろう」

だが彼は、その嫌いな百姓仕事をしながらもこつこ

つと小遣いを貯め、晴れて東京へ出て士官学校へ入ることしか考えていなかったのである。
代用教員になってしまったら、士官学校へ入れない。すくなくとも奮い立つほどの輝かしい未来を約束された勧誘ではなかった。
「やっぱり士官学校を目指します」
「なに士官学校？」
第一次大戦当時、大武勲を立てたという伝説の持ち主で、退役後農学校の教練の教官となった経歴の持ち主である八重田は、忽ち目を輝かせた。
「金を貯めて東京へ出るつもりです」
「なら、百姓仕事よりええ、代用教員といっても月給を払うんだから」
「月給を？」
「あたりまえじゃ」
こんどは豊太の眼が光った。
家が貧しいということは、金の価値観に早く目覚めさせる。
豊太は小学校の四、五年生の頃から、都田川の渡し船を利用して小遣い銭を稼ぐことを覚えたくらいだった。
豊太の住む油田部落と、気賀町の間には都田川が横たわり、当時はここを船で渡るか、さもなければずっと遠回りして、館山寺に通じる街道を迂回するしかなかった。
館山寺を回ると三十分もかかる道が、船で渡るとわずか百メートル足らずの対岸まで約三分、当然部落と街の往復には船を利用した。
だが、船といってもそれは船頭がいるわけではない。船そのものが舳先もない長方形の箱のようなもので、箱船の両側は竹筒がくくりつけてあり、その中を、対岸と結んだ太い綱が一本ずつ通してあった。つまり船に乗るには自分でその綱をたぐりながら動かすのである。
十人は乗れるこの箱船、水の上とはいえ、流れがあるのだから引っぱるにはかなりの力がいる。そこで利用者は何人か集まってから船を動かさなければならない。
豊太はこれに眼をつけた。
急ぎの利用者や老人、女などが来るのを待ってい

て、力を貸してやるのである。一回一銭足らずの駄賃だったが、子供の豊太にはこれがばかにならなかった。

八重田自身、豊太に興味を示したきっかけは、豊太が農学校時代、仲間との賭けで、一時間以上の匍匐前進をやってのけた現場を目撃してからだった。頭の良さには定評があったが、大柄な体で普段はもっさりとしており、なにを考えているのかつかみどころがなく、容易に正体が摑めないでいた。

だが、たかだか十銭の賭け金を得るためにみせた執念に、八重田は舌を巻いた。

軍事教練で生徒から一番嫌われるのがこの匍匐前進である。土の上に腹這いになり、肘と膝で前進してゆくわけだ。

「いくらくれます」

「そう、きまりで一ヵ月三十五円」

「三十五円！　毎月三十五円くれますか」

「あたりまえやないか」

百姓仕事ではその半分にもならない。

それから話はとんとん拍子に進み、新学期の四月、つまり今日の始業式がいよいよ先生稼業の門出となった。

門出は祝わなければならない。そこで彼は例の如く山羊を相手に一勝負、早朝のまだ明けきらぬうちから挑む気になったのである。身も頭も軽やかに門出するには、それが一番いい方法だった。

「ほれほれ、おとなしくしろよ」

豊太は、自分の投げた刈り草に釣られて動いた山羊の背後に素早く回りこんだ。

自分独りの気分だけの作業だったから、さして時間もかかるわけではない。やがて山羊が情けなさそうにか細く鳴くと、豊太はぶるっと頭を一つ振り、終ってからのろのろと小屋の柵をくぐった。

門出の祝いを自分独りですますと豊太は物置きから一台の自転車を引っぱり出した。

自転車といっても、クロームめっきの光ったところなど一ヵ所もない代物で、ハンドルといわずリームといわず、触われば赤い錆が手につくほどで、むき出しなチェーンには油気すらまったくなかった。

「おっかあ、いってくるぞ」

彼は家の中に声を掛けた。

貧乏小作農で、五人兄妹の次男坊である豊太は、家のなかでも邪魔者であった。なにを考えていようとなにをしようと、誰も格別な関心を払わない。そんな彼を農学校まで上げてくれたのも、例の神童のほまれ高き近隣の噂に、両親が抗しきれなかった故である。

埃を払ったサドルにまたがり、彼は悠々と家を出た。山名小学校までは十八キロ、約四里半である。

農学校時代もずっとこの自転車で通ったものだったが、その時からの習慣で、一秒間に二メートルの早さで走りつづけるのが一番疲れないということを知っていた。当時からこういう点は徹底した合理的な割りきりかたをし、同時に几帳面だった。

慌てず騒がず、ゆっくりと走りつづけるのである。

この計算でゆくと、一時間に七千二百メートル走れるから、十八キロの道のりはちょうど二時間三十分。八時半から始まる始業式に間にあうためには、午前六時に家を出ればいいのだが、三十分早く到着するつもりで、五時半に家を出たのだった。

「おい豊太、おまえ山名小学校の先生になるってな」

例の都田川の渡船場につくと、対岸からの戻り船を待っていた同じ部落の二、三人が話しかけた。

「頼まれたからなァ……」

「今日から登校じゃねえのか」

「ああ」

豊太は億劫そうに答える。人がなにをしようと勝手じゃないかという意識があった。村の者は偏狭で、やたらと干渉したがる。

「お袋に感謝するんだな。悧巧に生んでくれてよ」

「けどおまえ、下駄はいて、そのなりで行くのか」

豊太の服装を見回し、村の者は怪訝そうに聞いた。

なにしろ豊太の身なりはひどかった。

農学校へ通った四年間、暑かろうと寒かろうと、一日も欠かさずに着つづけたため……、というより、それしか着るものがなかったからだったが、袖のすり切れてしまった詰襟に、地が薄くなり、丸く膝の突き出たよれよれのズボン。

尻には褐色に変色してしまった手拭をぶら下げ、風呂敷に包んだ弁当をがたがた自転車の荷台にくくりつけ、下駄履きに髭づらというのだから、どうみても学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.